

自然誌

Natural history



三 重 自 然 誌 の 会 会 報 75 号

2008年 2月

鈴鹿市にて，レンカク夏羽を観察・撮影

チドリ目レンカク科のレンカク *Hydrophasianus chirus* は，インド，東南アジアから台湾にかけて生息する野鳥であり，日本へは迷鳥として極めて稀に飛来し各地で観察されているが，南西諸島での記録が比較的多い．三重県でのレンカクの過去の記録探しに時間を費やしたが，県内での野鳥記録のまとまった文献は少なく，結局，日本野鳥の会三重県支部の機関誌「しろちどり」53号P.26の「野鳥の記録(抜粋) 2006年」でのみ，一例のレンカクの記録を見つけることができた．その個体は，2006年10月31日，松阪市伊勢寺町四郷池で，太田幸男氏が観察されたものであり，その画像を拝見すると第一回冬羽の個体と思われた．このたび，鈴鹿市にて勝谷宜生氏が，一羽のレンカク夏羽を観察・撮影された．極めて貴重な記録であり，埋もれさせるのは惜しいので，ここに報告しておきたい．



2007年7月23日，鈴鹿市で勝谷宜生氏撮影．

データ

観察・撮影地：鈴鹿市土師の田園地帯

観察・撮影日時：2007年7月23日

午前11時～12時

観察・撮影者：勝谷宜生

滞在期間：初認当日のみ観察できた．

観察時の行動と他に目撃した鳥：水田の中で，何かをついばんでいた．時々，ハシボソカラスに驚くように，数mだけ飛ぶようすを数回観察した．その他，同地で見た野鳥は，ムクドリ，カルガモ，コサギ，アマサギ，コチドリ，ケリであった．

以上，三重県鈴鹿市におけるレンカク夏羽の一例を報告した．三重県の野鳥記録充実の一助となれば，幸いである．文末ながら，報告を筆者にゆだねられた勝谷宜生氏に深く御礼申し上げる．

〈多田弘一：松阪市嬉野中川町1110-4〉

松阪市曽原町におけるセイタカシギの観察記録

大 矢 正 雄

セイタカシギ *Himantopus himantopus* は三重県レッドデータブック2005では情報不足 (DD) に、国のレッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類 (EN) に分類される希少種で、観察される機会の多くない種である。本種について三重県松阪市で約2年間観察した記録を報告する。

1. セイタカシギについて

チドリ目セイタカシギ科セイタカシギ属に分類される鳥で、体長約32cm、背面が黒っぽく、首筋から腹部にかけて白、くちばしが黒の大型のシギ。赤または桃色の足が長いのが特徴で、和名のとおり背が高く、他のシギ類やチドリ類よりも水深の深いところまで活動できる (写真1)。

ユーラシア大陸の暖地、アフリカ北部、オーストラリア、南北アメリカ大陸に分布し、日本では1970年以前はまれに記録される程度であったが、現在では東京都、愛知県、石川県、長崎県、沖縄県などで記録されている。このうち、東京都や愛知県の埋立地では繁殖も確認されている。三重県では四日市市、松阪市、伊勢市での記録がある。



写真1 セイタカシギ(休息中)、休息中は1本足のことが多い。右端はオオハシシギ。

2. 観察地の概要

観察を行った場所は、図1に示したように松阪市曽原町曽原新田にあり、北側を蒼川に南側を三渡川にはさまれた遊水池で、南北約670m、東西約400mの逆L字型の低湿地帯である。西側を除く三方を高さ5mほどのコンクリート堤防で河川および海域と仕切られている。この遊水池の西側に広がる耕作地(水田及び畑地)には集落からの雨水や排水等が流入しており、南北方向のほぼ中間点にある曽原排水機場より水位が高くなると前面の海域に排水される。

この観察地を便宜的に北エリア、南エリア、西エリアに3区分したが、それぞれの概要は次のとおりである (写真3)。

・北エリア

蒼川から排水機場までの範囲で、東側と北側は堤防で西側は鋼鉄製の矢板による護岸が施されている。水深は実測していないので推定である (以下同じ) が、排水機場付近が最も深く80cm程度、西側の護岸付近で50cmほどであり総じて東に向かって浅くなっており、東側の堤防下には南北に帯状の幅約10~15mのヨシ原が形成されている。また池の中央部に浅瀬があり、低水位時には干潟となり、シギ、チドリ類の採餌場となっているほか、魚捕り用の石積みが10箇所以上あり、カモ類、シギ類などの休息場として利用されている。

・南エリア

排水機場から三渡川までの範囲で、東側と南側は堤防で仕切られている。西側は石積み護岸が施さ

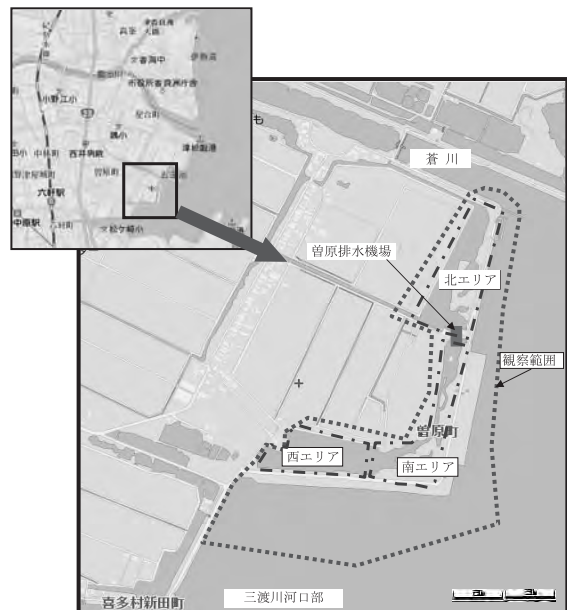


図1 観察地の位置 (松阪市曽原町)

れるが草本類に覆われている。このエリアは3エリアのうちで水深が最も浅く、中央部を除いてヨシ原が形成されている。

・西エリア

観察地の南西端から東の範囲で、南側は堤防で北側は鋼鉄製の矢板による護岸が施されている。このエリアは3エリアのうちで水深が最も深く(水際を除けば、推定50cm以上)、西側の人家下にわずかにヨシ原があるのみで水面面積が大きい。冬季にはオナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ等のカモ類が多く出現する。



写真3 左から、北エリア、南エリア、西エリア

3. 観察結果

観察期間は2005年11月から2007年12月までの26ヶ月間であり、観察地域内においてセイタカシギの存否の確認を主に行った。そのため1回あたりの観察時間は10分～50分で、できる限り観察回数を増やすことを念頭において行った。観察は海岸堤防上から8倍の双眼鏡を用いて行った。また、デジタルカメラによる写真撮影を行い、この写真により不明な点を専門家に確認した。

結果は表1に示すとおり、この観察期間内に107回の観察を行い、そのうち47回本種が出現した。確認できなかった月も5回あるが、ほぼ周年この地域に生息しているものと考えられる。なお、セイタカシギの生息は全て堤防内で確認され、堤外(河川、海側)では確認されなかった。出現時の詳細は表2に示したとおりであり、出現個体数は2007年4月15日の4羽、11月3日の5羽を除けばいずれの観察日もとも1～3羽と多くない。複数の個体が確認された場合は同じエリアの互いの近くで行動しており、集団で行動するように見受けられたが、唯一、2007年4月15日には南エリアで3羽、北エリアで1羽が同時帯に観察された。

2007年5月までは北エリア、南エリアそれぞれで確認されたが、それ以降は南エリアのみの確認となっている。なお、西エリアについては2005年12月末から翌年の1月中旬までの3回確認されているが、いずれの日も西よりの風が比較的強い日であり、人家下のヨシ原や南側堤防下の西端近くで強風を避けて休息していたものと考えられる。西エリアは前述したように他エリアに比べ水深が深いので利用が少ないのであろう。

活動別に見ると、採餌がもっとも多く、シギ類に特有なせかせかとした動きで餌を追っていたが、捕獲した餌の種別までは特定できなかった。また、休息の多くは水中に1本足で立って佇んでいたが、北エリアの石積みの上で休息する個体も観察された。今回の観察期間中に雄

表1 セイタカシギの月別観察結果

	観察 日数	セイタカシギ 出現日数	出現率 (%)
05年11月	1	1	100
05年12月	2	2	100
06年1月	6	4	67
06年2月	4	3	75
06年3月	2	1	50
06年4月	0	0	—
06年5月	1	1	100
06年6月	4	0	0
06年7月	4	0	0
06年8月	3	1	33
06年9月	5	1	20
06年10月	4	1	25
06年11月	2	1	50
06年12月	1	0	0
07年1月	3	0	0
07年2月	8	5	63
07年3月	4	2	50
07年4月	3	2	67
07年5月	4	2	50
07年6月	2	0	0
07年7月	7	3	43
07年8月	8	5	63
07年9月	7	4	57
07年10月	13	6	46
07年11月	6	1	17
07年12月	3	1	33
合 計	107	47	44

表2 セイタカシギの観察結果

観察日	出現 エリア	出現数	行 動	観察日	出現 エリア	出現数	行 動	観察日	出現 エリア	出現数	行 動
05.11.29	北	2	採 餌	07.02.06	南	1	採 餌	07.08.17	南	1	採 餌
05.12.04	北	3	採 餌	07.02.11	南	1	採 餌	07.08.19	南	1	休 息
05.12.31	西	3	休息、飛翔	07.02.18	南	1	休 息	07.08.29	南	1	休 息
06.01.04	西	3	休息、飛翔	07.02.24	南	1	休 息	07.09.02	南	1	採 餌
06.01.15	西	3	休息、飛翔	07.02.25	南	1	休 息	07.09.07	南	2	採 餌
06.01.21	北	3	採 餌	07.03.16	南	1	休 息	07.09.22	南	2	休 息
06.01.29	北	3	採餌、休息	07.03.24	北	1	休 息	07.09.29	南	2	採 餌
06.02.05	北	3	休 息	07.04.15	南、北	3 + 1	採餌、休息	07.10.02	南	2	採 餌
06.02.25	南	2	採 餌	07.04.28	北	1	採 餌	07.10.06	南	3	採餌、休息
06.02.28	北	3	採餌、休息	07.05.03	北	1	採 餌	07.10.08	南	2	採 餌
06.03.05	南	3	休 息	07.05.04	北	1	休 息	07.10.13	南	2	採 餌
06.05.20	北	2	採餌、休息	07.07.01	南	3	採 餌	07.10.23	南	2	採 餌
06.08.27	北	2	休 息	07.07.13	南	3	採餌、休息	07.10.24	南	1	採 餌
06.09.21	北	2	採餌、休息	07.07.29	南	2	採 餌	07.11.03	南	5	採餌、休息
06.10.14	北	2	採餌、休息	07.08.02	南	2	採餌、休息	07.12.29	南	2	採 餌
06.11.02	北	1	採 餌	07.08.05	南	2	採餌、休息				

のフライトディスプレイ（5～10mの高さでホバリングしては下降し、また元の高さに戻る動作を繰り返す）を含む繁殖行動は確認できなかった。

この観察期間中に確認された他の鳥類の主なものの和名を以下に五十音順に列記する。

アオサギ、オオタカ、オオハシシギ、オオバン、オナガガモ、カルガモ、カワウ、キンクロハジロ、ケリ、コアジサシ、コガモ、コサギ、ダイサギ、タゲリ、タシギ、チュウシャクシギ、ツルシギ、トビ、ハクセキレイ、ハシビロガモ、ヒドリガモ、ホシハジロ、ミサゴ、ヨシガモ

謝 辞

文末ではありますが、本調査を行うにあたり、つたない写真による同定にご尽力いただいたほか、折にふれ適切なご助言をいただいた四日市市の市川雄二氏に厚くお礼を申し上げます。

文 献

三重県. 2006. 三重県レッドデータブック2005動物

環境省. 2002. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—2鳥類. 財団法人自然環境研究センター

高野伸二. 1982. フィールドガイド日本の野鳥. 財団法人日本野鳥の会

〈おおや まさお：松坂市舞出町〉

マーキングされたアサギマダラを捕まえる

「三重県仲間」の県外調査中に偶然、マーキングされたアサギマダラを捕獲したので報告する。捕獲したアサギマダラはマーキングされた内容を確認後、そのまま放蝶した。マーキングの内容等は次のとおり。なお、本データは Web 上の「アサギマダラ・マーキング・データブック」に報告済みである。

・捕 獲 年 月 日： 2007年10月21日

・捕 獲 場 所： 愛知県豊橋市嵩山町本坂トンネル入り口付近(北緯34度47分56秒，東経137度28分57秒)

・マーキング内容： 7256 デコ S R S 8/25

(中 優：伊勢市小俣町本町1284)

夏の贈り物 ～オオシイノミガイの打上～

中 野 環

この夏は、伊勢湾で大規模な赤潮が発生しました。この影響なのか海岸にはいろいろな生物の漂着がありました。津市の海岸で比較的多くのオオシイノミガイ *Actaeon siebadii* (Reeve, 1842) の漂着があったので報告します。

オオシイノミガイは房総半島から九州にかけての浅瀬に生息する殻高20mmほどの種です。殻色は暗褐色の色帯をめぐらす白い地味な貝です(写真1)。近年、神奈川県平塚市から大磯町にかけての海岸で、大量のオオシイノミガイの漂着記録があります(福田, 2004)。相模湾においても、通常は年間を通じて数個体が得られる程度ですので、絶滅寸前の評価がなされています(池田ら, 2001)。

三重県においては、鳥羽市答志、志摩市安乗の水深50～100m(松本, 1979)、および答志島沖水深7～20mにかけられた蛸壺中より得られています(中野・中, 2007)。また、筆者の手元には1981年5月4日に伊勢市二見浦で得た2個の小さな標本がありますが、一度に多くの個体を得られる種ではありません。本種の生息域は水深10m以深と考えられていますので、三重県レッドデータブック2005では調査の対象外となり、ランクの評価はされませんでした。これまでの記録数からすると本種は危機的な状況にあると思われます。

今回、津市柳山の海岸(写真2)にて2007年8月30日に31個体、9月7日に4個体を得ることができました。多くはアナアオサやオゴノリなどのゴミの中から(写真3)、三重県レッドデータブック2005で危惧種に指定されているネコガイ、フジノハナガイと共に得られました。今回得られた35個体は手持ちの鳥羽市答志、二見浦の標本に比べて大型に感じました。殻幅平均6.4mm、殻高平均12.4mmで、これまでに得ている3個体の平均殻幅、殻高よりもそれぞれ2mmほど大きくなりました(図1、表1)。また、全て死殻でしたが、軟体の一部が残っているものもあり、斃死後間もない個体だと思われます。

なお、同時期に津市白塚、松阪市三雲、松阪市松名瀬も歩きましたが得られませんでした。津市近辺の海域で個体群が増加している可能性があります。嬉しい夏の贈り物となりました。



写真1 オオシイノミガイ



写真2 津市柳山



写真3 ゴミの中のオオシイノミガイ

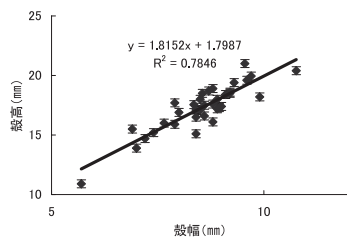


図1 オオシイノミガイの殻高と殻幅

表1 オオシイノミガイのサイズ

	殻幅 [mm]	殻高 [mm]	採 集 場 所	日 付	採集方法
	6.5	11.5	伊勢市二見町 二見浦	1981.05.04	打 上
	4.2	9.3	伊勢市二見町 二見浦	1981.05.04	打 上
	5.6	10.9	鳥羽市答志島	2004.09.25	蛸 壺
平 均	5.4	10.6			
今回の平均	6.4	12.4			

文 献

池田 等・倉持卓司・渡辺政美. 2001. 相模湾産レッドデーター貝類一. 104pp. 葉山しおさい博物館. 神奈川県.
松本幸雄. 1979. 三重の貝類(三重県産貝類目録). 179pp. 鳥羽水族館. 鳥羽.
中野 環・中 優. 鳥羽市答志島の貝類. 三重自然誌, (11). 26-40.

〈なかの たまき: 度会町大野木1711-1〉

「三重貝仲間」 県外調査記録2007

中 優 ・ 中 野 環

『三重貝仲間』は、鈴木慎一、中野環、中優の3名が2007年春頃に立ち上げた同好会的な集まりで、三重県内のみならず広く県外の貝類についても、定期的に調査を行っていくことを主な活動としている。県内では平成の大合併前の旧69市町村の中で標本による確認が全くないかあるいは少ない市町村、県外では各人が調査してみたいと考えている場所について、現地調査を行ってデータの収集に努めていくこととしており、毎年県内2ヶ所と県外1ヶ所の調査が当面の目標である。2007年10月20～21日、



写真1 石巻山山頂(石灰岩が露出している)

県外初めての調査地として愛知県豊橋市にある石巻山(写真1)とその周辺地域を選び調査したので、その結果を報告する。なお、鈴木は急用のため今回の調査には参加できなかった。

石巻山は、井関によると、「愛知県豊橋市東部にある山。標高358m。下部は秩父古生層の輝緑凝灰岩からなるが、山頂部は石灰岩からなり奇峰を呈する。石灰岩地植物群落（天念記念物）や嵩山（すせ）蛇穴（史跡名勝）等学術的に貴重な自然資源を有する。」と紹介されている。外観は周囲の山から突き出たよう

な特異な形をしており、遠方からでも簡単に認識できる。ハイキングコースが設定されており、調査当日も多くのハイカーが訪れていた。

石灰岩地域であることから、陸産貝類は多く、以下に示す27種を確認した。和名に※を付記した種は殻のみの確認であり、学名の次に示したのは採集場所で、「石」は石巻山、「蛇」は嵩山蛇穴付近、「本嵩」は本坂トンネルの嵩山町入口付近、「本三」は本坂トンネルの三ヶ日町（静岡県）入口付近のことである。今回採集した種のうち、ハチノコギセル、クビナガギセル、オモイガケナマイマイ、イシマキシロマイマイの4種は石巻山が、ミカワマイマイは嵩山が模式産地であり、5種とも環境省レッドデータブック（2005）とレッドデータブック愛知2005の掲載種である。また、イボイボナメクジも環境省レッドデータブック（2005）の掲載種である。ミカワマイマイは近年個体数が激減しているといわれており、今回は生きた個体を採集できなかったが、嵩山蛇穴付近では比較的新しい幼貝の殻を1個採集したことから、細々と生息していると思われる。また、本坂トンネルの静岡県側でも成貝を1個採集したが土に埋もれた状態ですでに白化しており、ここでの生息の可能性は低いと思われる。他の4種については生きている個体も確認でき、クビナガギセルについては個体数も多かった。



写真2 上から、ベニゴマオカタニシ、クビナガギセル、オモイガケナマイマイ、ミカワマイマイ

1. ベニゴマオカタニシ *Georissa shikokuensis* 「石」「蛇」
2. ヤマトニシ *Cyclophorus herklotsi* 「石」
3. ミジンヤマトニシ *Nakadaella micron* 「蛇」
4. イシマキシロマイ *Diplommatina kiiensis ishimaensis* 「石」「蛇」
5. ヒダリマキゴマガイ *Palaina pusilla* 「石」「蛇」「本嵩」
6. スジケンガイ *Carychium noduliferum* 「蛇」「本嵩」
7. キセルガイモドキ *Mirus reinianus* 「石」「蛇」
8. オオギセル *Megalophaedusa martensi* 「石」「蛇」「本嵩」「本三」

9. ハチノコギセル *Mundiphaedusa kawasaki* 「石」
10. クビナガギセル *Pinguiphaedusa kubinaga* 「石」
11. エルベリギセル *Tyrannophaedusa aurantiaca erberi* 「石」
12. オカチョウジガイ※ *Allopeas clavulinum kyotoense* 「石」
13. イボイボナメクジ *Granulilimax fuscicornis* 「石」
14. ヤマナメクジ *Meghimatium fruhstorferi* 「蛇」
15. マルシタラガイ※ *Parasitula reinhardti* 「石」
16. ウメムラシタラガイ※ *Sitalina japonica* 「本嵩」
17. ウラジロベッコウ※ *Urazirochlamys doenitzii* 「石」
18. オオクラヒメベッコウ※ *Yamatochlamys lampra* 「石」
19. ピロウドマイマイ属の一種※ *Nipponochloritis* sp. 「石」
20. カドバリニッポンマイマイ※ *Satsuma japonica carinata* 「蛇」
21. オモイガケナマイマイ *Aegista inexpectata* 「石」
22. オオベソマイマイ属の一種※ *Aegista* sp. 「石」
23. オオケマイマイ *Aegista vulgivaga* 「石」「蛇」「本嵩」「本三」
24. ヒラマイマイ※ *Euhadra eoa* 「石」「蛇」
25. ミカワマイマイ※ *Euhadra scaevola mikawa* 「蛇」「本三」
26. イシマキシロマイマイ *Trishoplita calcicola* 「石」「蛇」
27. タワラガイ *Sinoennea iwakawa* 「石」

本調査にあたっては、愛知県の西尾和久氏に数多くの情報をいただいた。記して感謝する。

文 献

井関 弘太郎 世界大百科事典 日立デジタル平凡社

くなか まさる：伊勢市小俣町本町1284／なかの たまき：度会町大野木1711-1＞

セミナー「レッドデータブックの活用状況と今後の課題」の報告

平成19年12月1日(土)に表題をテーマとした「自然環境保全セミナー」を津市河芸町の財三重県環境保全事業団で開催しました。当日は、自然誌の会の方々をはじめ、県、市町の環境、農林水産、土木関係等、約40名の参加がありました。

はじめに、基調講演として環境省中部環境事務所統括自然保護官・常富豊氏と県立特別支援学校玉城わかば学園教諭・清水善吉氏のお二人にお話していただきました。常富氏には「レッドデータブックの意義と重要性について」についてご講演いただき、

「国で発行しているレッドデータブックは法制度上の規定はないものの、種の保存法をはじめ各種の法的規制の根拠となる科学的知見としての役割が大きい。また、5年毎にレッドデータリストとして見直しを行って発表しており、今後も定期的に見直しすることで種の動向等を把握し、レッドデータブックに記載される種を少しでも減らし、最終的にはレッドデータブックに記載される種を無くすることが理想である」等のお話がありました。清水氏には「なぜ希少生物を守るのか？」についてご講演いただき、「レッドデータブックが出来る以前の動植物を保護する法律、制度や三重県における希少種の状況等についてのお話、希少種そのものを守ることも大事だが、それよりもその種が生育・生息している環境全体を守ることが大事である」等のお話がありました。

その後、元三重県立博物館長の富田靖男氏を座長に自然を保全する立場（研究者、県環境関係）と開発する立場（県農林関係、町企業立地関係）の方にパネラーとして参加いただき、パネルディスカッションを開催しました。ディスカッションでは、パネラーの方それぞれの立場におけるレッドデータブックの活用方法や課題等についてご発言をいただいた他、「レッドデータブックがあまり一般に浸透していないのでもっとPRに務めた方が良い」、「小学校に無料配布して興味を持ってもらったらどう



写真 基調講演のようす（清水氏）

か」等の意見もあり、活発に論議していただきました。また、参加者からも多くの意見等があり、盛況のうちにセミナーを終了できたと考えております。

最後に今回のセミナーでご講演いただいた常富氏、清水氏をはじめ、座長をお願いした富田氏、パネラーでご参加いただいた武田、山内、近藤、筒井、大矢各氏、ならびに当日ご参加いただいた皆様にはこの紙面をお借りしてお礼申し上げます。

＜宮本佳典：財団法人三重県環境保全事業団＞

事務局から

○会費納入のお願い

本会会費（個人1500円、家族2000円）は前納制になっております。お近くの郵便局から2008年会費をお振り込み下さい。

○会報・会誌の原稿募集

会報「自然誌だより春号」は4月、会誌「三重自然誌12号」は秋頃に発行予定です。観察記録や会への要望、自然保護や博物館整備についてなど、ふるってご投稿ください。

○新博物館整備についての意見、ありがとうございました

三重県が進めている新博物館整備について、意見交換会への参加やパブリックコメントの提出を多くの会員の方々にも参画いただきました。自然史博物館あるいは総合博物館における自然史部門の充実について積極的なご意見があったようにお聞きしておりますが、現在の流れは県内博物館のネットワークや公文書館などに重きをおいており、人文系の現況に基づいた整備が主流です。残念ながら、県事務局サイドに自然誌について発言できる人が非常に少ない（いない）現状がありますので、やはり今後も継続してわれわれが発言していく必要があります。会員の皆様には、引き続きご支援よろしくお願いいたします。なお、会員のパブコメの一部は本会ホームページでご覧いただけます。

○3県合同シンポ「紀伊半島の野生生物」、今年は三重県で開催

2002年に熊野市紀和町で第1回が開催された3県合同シンポジウムですが、昨年11月に奈良県桜井市で行われた奈良大会で3巡目に入ることを決定しました。そろそろ、一度「お休み」にしたかったのですが、三重県から呼びかけた手前「止めましょう」と言いそびれていたところ、会場にみえたトンボの石田昇三氏がいつものごとくやる気満々のご発言をされ、三重大会開催が決まりました。前回の大会では「しぜん文化祭」を実施しましたが、今年はどうするか思案をしています。県立博物館が呼びかけて「しぜん文化祭」のような催しをするとイメージアップにもなると思うのですが、いかがでしょうか。

編集後記

2007年から運営委員を務めさせていただくようになりましたが、その大きな役割が「自然誌だより」の原稿集めと委員を受諾した後に知りました。「後の祭り」的な今回のようなケースはこれまでも幾度かあり、これが私の定めなのかなとも思っています。ただ、今回原稿をお寄せいただいた方々には、急なお願いにもかかわらず快諾していただき感謝しております。あとは春が来るのを待ち、採集にいそしみたいと考えています。 (MN)

自然誌だより75号

発行日 2008年2月1日
事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17
清水善吉方 三重自然誌の会
<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会
郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会
年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）
e-mail: mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp